ISBN4-9911-3011-3
C3047 P1800E

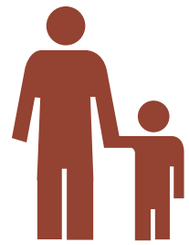
9784991130113

1923047018007

定価 本体 1,800 円＋税

親子の心の診療に関する多職種連携マニュアル

親子の心の診療に関する多職種連携マニュアル



妊娠期から思春期の親子 30 症例　感動の多職種連携

親子の心をサポートする 27 の職種

親子の心をサポートする 46 の部署

令和元年度厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業（健やか次世代育成総合研究事業））
「親子の心の診療を実施するための人材育成方法と診療ガイドライン・保健指導プログラムの作成に関する研究班」作成

ISBN4-9911-3011-3
C3047 P1800E

9784991130113

1923047018007

定価 本体 1,800 円＋税

親子の心の診療に関する多職種連携マニュアル

親子の心の診療に関する多職種連携マニュアル

妊娠期から思春期の親子 30 症例　感動の多職種連携

親子の心をサポートする 27 の職種

親子の心をサポートする 46 の部署

令和元年度厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業（健やか次世代育成総合研究事業))
「親子の心の診療を実施するための人材育成方法と診療ガイドライン・保健指導プログラムの作成に関する研究班」作成

親子の心の診療に関する
多職種連携マニュアル

（症例・職種・部署）

序　文

子どもの心の問題に対する社会の関心が高まる中、その問題の解決には子どもの心の支援のみではなく、親を含む家族の心の支援が必要になります。そのためには産婦人科、小児科、精神科、心療内科を含む多数の診療科と多職種の連携が重要になります。厚労科研成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「親子の心の診療を実施するための人材育成方法と診療ガイドライン・保健指導プログラムの作成に関する研究班」（平成２９年度～令和元年度）で、親子の心の診療に関する多職種連携マニュアルを作成しました。

マニュアルは**「連携症例集」**、**「連携職種」**、**「連携部署」**の３つのパートから構成されています。妊娠期から思春期における親子の心の問題について「連携症例集」から、診療科間、多職種間の連携方法を本書から学ぶことができます。その職種の診療内容や支援内容は「連携職種」に簡素にまとめられています。そして、親子の心の診療のためにどの行政機関や教育機関などと連携をすればよいのか各々の機関の特徴を「連携部署」から知ることができます。様々な職種や部署が心の診療の中でできることを知ることで、多職種、多機関の連携が深まり、心が救われる子どもと親が増えることが期待されます。医療職、教育職、行政職の方々を対象に本書を作成しました。また、当事者の方々も関連する部分を印刷して手渡していただけると幸いです。

研究代表者　永光信一郎

目次

連携症例 7

1. 若年妊娠 17 歳 8
2. 産後うつ 30 歳 10
3. ボンディング障害 32 歳 12
4. 育児不安 28 歳 14
5. 精神疾患合併妊娠 35 歳 16
6. ドメスティック・バイオレンス(DV) 32 歳 18
7. 経済的不安 39 歳 20
8. 育てにくさ 6 歳 22
9. 分離不安 5 歳 24
10. 発達障害 7 歳 26
11. 場面緘黙 8 歳 28
12. 親が叩く・怒鳴る 9 歳 30
13. 知的な問題 10 歳 32
14. イライラする・暴力 12 歳 34
15. 不登校 13 歳 36
16. いじめ 13 歳 38
17. 腹痛・頭痛 14 歳 40
18. 朝起きられない 14 歳 42
19. 摂食障害 14 歳 44
20. 性別違和　トランスガール 14 歳 46
21. 月経痛 15 歳 48
22. 性被害 15 歳 50
23. 自傷行為 15 歳 52
24. 昼間の眠気 16 歳 54
25. やる気がない、落込む 16 歳 56
26. ネット・ゲーム依存 16 歳 58
27. 希死念慮 17 歳 60
28. 誰もいないのに声が聞こえる 17 歳 62
29. ひきこもり 25 歳 64
30. 保護者が精神科に通っている 11 歳 66

連携職種 69

医療機関

1. 小児科医 70
2. 産婦人科医 70
3. 精神科医 70
4. 子どものこころ専門医 71
5. 児童精神科医 71
6. 心療内科医 71
7. 小児神経科医 72
8. 公認心理師 / 心理士 72
9. 助産師 72
10. 看護師 73
11. 精神保健福祉士（PSW） 73
12. 医療ソーシャルワーカー（MSW） 73
13. 管理栄養士 / 栄養士 74
14. 言語聴覚士 74
15. 作業療法士 74
16. 理学療法士 75
17. Hospital play specialist / Child Life Specialist 75
18. 病棟保育士 75

教育機関

19. 養護教諭 76
20. スクールカウンセラー 76
21. スクールソーシャルワーカー 76
22. 保育士 77
23. 学校医 77

行政機関

24. 保健師 77
25. 児童福祉司 78
26. 児童心理司 78
27. 弁護士 78

連携部署 79

医療機関

1. 小児科 (病院） 80
2. 小児科（クリニック） 80
3. 産婦人科（病院） 81
4. 産婦人科（クリニック） 81
5. 精神科（病院） 82
6. 精神科（クリニック） 82
7. 心療内科（病院） 83
8. 心療内科（クリニック） 83
9. 心理室 84
10. 精神科デイケア 84

教育機関

11. 教育委員会 85
12. 特別支援学級 85
13. 通級指導教室 86
14. 適応指導教室 86
15. 特別支援学校 87
16. フリースクール等 87
17. 通信制高校 88

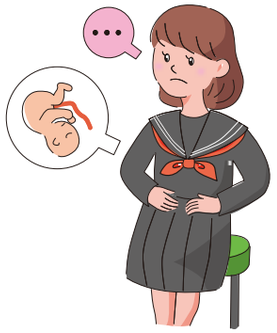
行政機関

18. 児童相談所 88
19. 保健所 89
20. 保健センター 89
21. 子育て世代包括支援センター 90
22. 産後ケア施設 90
23. 子育て支援部署（課） 91
24. 保育関連部署（課） 91
25. 母子保健関連部署（課） 92
26. 障害者福祉課 92
27. 生活保護課 93
28. 配偶者暴力相談支援センター / 性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センター 93
29. 要保護児童対策地域協議会(要対協) 94
30. 社会福祉協議会（社協） 94
31. 精神保健福祉センター 95
32. 若者サポートステーション 95
33. 発達障害者支援センター 96
34. 少年サポートセンター(警察機関) 96
35. 生活自立支援センター 97
36. 放課後等デイサービス 97
37. 放課後児童クラブ 98
38. あんしん母と子の産婦人科連絡協議会(里親･特別養子縁組) 98
39. 乳児院 99
40. 児童養護施設 99
41. 児童心理治療施設 100
42. 母子生活支援施設 100
43. 療育施設 101
44. 市町村管轄の発達支援 101
45. 児童発達支援センター及び事業所 102
46. 児童自立支援施設 102

連携症例

連携症例ファイル　#1

若年妊娠　（17歳）



はじまり

Cさんが２歳のときに両親が離婚し、はじめはお母さんと２人でアパートに住んでいましたが、Cさんが４歳の頃、経済的な理由でおばあちゃんと同居することになりました。お母さんとおばあちゃんはとても仲が悪く、おばあちゃんがお母さんに酷いことを言ったりするので、家にいてもCさんはいつも孤独を感じていました。家に居たくないCさんは高校生になるとガソリンスタンドでアルバイトを始め、５歳年上の男性と親しくなりました。すぐに男性のアパートへ出入りするようになり、男女の関係になりました。Cさんは生理が来ていないことに気づいていましたが、誰にも打ち明けられずにいました。自分が妊娠していると思いたくなかったのです。

気づき

ある日Cさんは、男性に生理が来ていないことを伝えましたが、男性は戸惑うだけでした。Cさん自身も妊娠を認めたくない気持ちが強く、何も出来ないまま数ヶ月が過ぎました。その後、Cさんの走り方がおかしいことに気づいた体育の先生から保健室に呼び出され、妊娠検査で陽性反応が出たのでした。お母さんと一緒に**産婦人科**を受診したところ、すでに妊娠２７週と診断されました。お母さんは強く中絶を希望したのですが、２２週以降は中絶手術が出来ないと断られ、Cさんとお母さんは絶望した気持ちで家に帰りました。家では事実を知ったおばあちゃんが激怒し、またお母さんを責め始めました。Cさんは死にたい気持ちになっていました。相手の男性にLINEで妊娠を知らせたのですが返信はなく、突然ガソリンスタンドも辞めて、アカウントを消され、引越しして連絡も取れなくなってしまいました。

つなぐ

絶望するCさんでしたが、学校に行くと**養護の先生**が養子縁組の可能性のある妊婦さんを出産まで支援してくれる産婦人科を捜してくれていました。受診してみると検診の費用が無料になる「公費助成券」が使えるように、**保健センター**に行って母子手帳を受け取るようアドバイスされ、保健センターでは**保健師**さんが親切に対応してくれました。

出産までの約１か月、家にいると近所や友達の目が気になるため、**産婦人科クリニック**で保護してもらうことになりました。Cさんの妊娠を知る**担任の先生**や養護の先生・**スクールカウンセラー**も親身になってくれ、Cさんは今までにない心強さを感じました。Cさんが保護されている間に、産婦人科施設から保健師、**児童相談所**、**市町村の子ども課**に要請し、**要保護児童地域対策協議会**が開催されました。その結果、Cさんは幼少期より児童相談所に相談歴があることが判明し、出産後も地域の見守りが必要であると意見が出されました。

その後

Cさんは無事に出産。入院中、Cさんは赤ちゃんに強い愛着を見せたのですが、愛おしい気持ちが強くなるにつれ、赤ちゃんの幸せを第一に考えようと**特別養子縁組**を選択することに決めました。赤ちゃんは、あっせん団体を通じて愛情深い養親に引き取られていきました。

その後のCさんですが、学校の先生たちの手厚いサポートの中で出産の事実が友人に知られることもなく、無事に復学することができました。Cさんの出産を機にお母さんはおばあちゃん達との同居を解消し、Cさんと２人で暮らすようになりました。Cさんの癒しと親子関係の再構築を試みるために、継続的な見守りが続いています。

連携する職種と部署

職種
- 産婦人科医70・養護教諭76・保健師77・学校担任・スクールカウンセラー76

部署
- 保健センター89・産婦人科クリニック81・児童相談所88
- 子育て支援部署（課）91・要保護児童対策地域協議会94
- 里親・特別養子縁組98

連携症例ファイル　#2

産後うつ（30歳）

はじまり

A子さんは初めての妊娠で**産婦人科**を受診しました。問診ではいままで病気らしい病気はしたことはないと言っていましたが**助産師**の問いに学生時代に不眠症があったけど今は薬を飲んだりはしていないと答えます。胎児心拍も確認でき、予定日を決定しました。

気づき

妊娠初期につわりがひどく、夜間に何度も来院、点滴を受けています。来院時はいつもひとりで、夫は仕事が忙しくて、と。その後の妊娠経過は順調でしたが、妊娠後期に入り徐々に血圧が上がり始め妊娠高血圧症と診断されます。妊娠３９週２日に胎児心拍異常疑いで入院、分娩誘発で２０７４gと少し小さめの女児を分娩。児は低血糖の症状があり**小児科**で点滴等の処置がされ軽快しますが、「赤ちゃんが小さくて心配、母乳の出も悪い、家へ帰るのも心配」という発言を助産師さんが聞き退院後の見守りが必要ではないかと進言します。

つなぐ1

入院中に**医療ソーシャルワーカー**（MSW）が面談します。夫は仕事が忙しくて育児を手伝ってくれるかわからない。実母はすでに他界しているし兄弟はなく義母は他県在住のため、育児を頼る人がいない、母乳も回りの産婦さんのように出ないし夜に泣き出すともうどうしようもなくなる。この子を育てる自信がないと不安を訴えられます。この時行ったエジンバラ産後うつ病質問票（EPDS）は１８点あり、産後うつの可能性が高いと判断し地域の**保健センター**へ報告。退院後は保健師が家庭訪問をすること、産後２週間に産婦人科外来でフォローすることとしました。産後５日目に新生児の体重も増加し、笑顔も見られ始めたので退院の上、**保健師**に訪問してもらう、不安を感じたら来院することを約束して退院となりました。

つなぐ2

自宅訪問した保健師からは必要物品も揃っており、本人も笑顔がみられるとの報告があり、継続して見守りの方針としました。産後２週間で産婦人科外来を受診しましたが授乳のため夜眠れないと訴えます。新生児の体重は増えていて身体も衣服も清潔に保たれていましたが本人の表情はやや硬くげっそりした印象でした。EPDSも依然１６点と高値のため、一度**心療内科**を受診するように説得、地域の保健センターにも経緯を報告しました。数日後、自宅近くの**精神科クリニック**から産婦人科に受診の報告があり、不安に対して投薬したいが薬の母乳移行の問題があると相談されました。小児科と相談の上、投与量が少なければ投薬可能であること、小児科でも赤ちゃんのフォローをすることを伝え治療が開始されました。

その後

産後1か月健診では笑顔もみられるようになり赤ちゃんの体重も増加、EPDSは依然８点でしたが夜は夫がミルクをあげてくれるので眠れているとのことでした。保健師も定期的に訪問しており、頓服の抗不安薬を処方されながら育児をされています。

連携する職種と部署

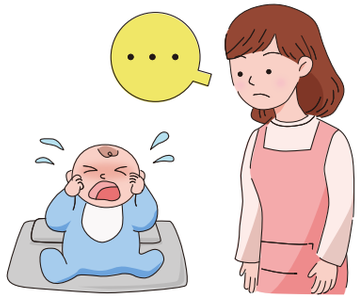
職種
・産婦人科医70・助産師72・小児科医70・医療ソーシャルワーカー73
・保健師77・心療内科医71・精神科医70

部署
・産婦人科クリニック81・保健センター89・心療内科クリニック83
・精神科クリニック82・小児科クリニック80

連携症例ファイル　#3

ボンディング障害

（32歳）



はじまり

Aさんは３２歳のパートタイム勤務です。男児２人の育児は大変な中、女の子を期待する気持ちもありました。今回の妊娠は夫婦ともに期待と喜びを持って**産婦人科**での説明を聞きました。その後妊娠２０週頃、胎児の心臓に問題があることを告げられ強い不安が生じました。

気づき

助産師に、Aさんはこれからは胎児エコーなど赤ちゃんの様子がわかる診察は受けたくないと訴えました。お腹の中にいる子どもの障害を考えると苦痛で居てもたってもいられなくなる、生まれてから育てていけるのか不安と語りました。「お母さんと赤ちゃんの心と身体が大切です。これからもお気持ちを聞かせて下さい。」と伝えました。

つなぐ１

助産師面接で育児支援チェックリストとエジンバラ産後うつ病質問票を記入してもらいました。育児支援チェックリストの流死産についての項目は空白になっていました。カウンセリングや精神科既往歴には“はい”と回答があり、思春期に親子関係がつらくてカウンセリングを受けたとのことでした。困ったときの相談相手は夫には何でも打ち明けられる一方で実母には打ち明けることが出来ないと回答していました。子どもの障害の可能性を打ち明けたところ、冷たい傷つく言葉を投げかけられたとのことでした。エジンバラ産後うつ病質問票は２４点と高得点で、項目１０の自分を傷つけたくなるは3点でした。「妊娠をなかったことにしたい。子どもを流産することを考えてしまう。そんな自分も嫌になる。」とのことでした。不眠や焦燥感も強く生活にも支障が出ていたので**精神科**の受診を進めたところ『それで何か解決するんですか』と言いながらも承諾されました。

つなぐ２

精神科ではお腹の子どもがモンスターのように思え、胎動があると拒絶感で急に鳥肌が立つこと、その将来を子どもたちや家族を脅かす存在のように想像してしまうことが語られました。家庭でもぼんやりした状態が続き子どもたちも不安になっているとのことから**保健師**の家庭訪問を依頼しました。保健師の勧めもあり妊娠･出産･育児のサポートを受けることを夫婦で病院に相談に行くこととなりました。**医療ソーシャルワーカー**が心配事について産科や精神科と一緒に考えていきましょうと声をかけました。胎児の状態を診察した**小児科医**より出産後に命に関わる状態に陥ることもありうるとの説明に、限りある命なら向き合えるかもしれないと話すなど気持ちは大きく揺らぎました。子育てが困難な状況の場合の相談先として**児童相談所**の職員とも面談し**乳児院**への一時保護や**養育里親制度**の説明を受けました。生まれてきた赤ちゃんは新生児治療ユニット（NICU）に入院しました。両親で面会に来ても赤ちゃんを抱いて嫌悪感を抱いてしまったらどうしようと不安で、入り口に佇んで凍り付いている母親に、**臨床心理士**が声をかけ、ここまで来たことの労いと焦らなくてよいことを伝えました。出産後も続いていた精神科への通院で2カ月を過ぎた頃、自分だけの面会の時に子どもと会い触れることが出来たことを語りました。それまで口にしなかった子どもの名前を呼び“うちの子”として語っていました。

その後

３カ月を過ぎNICUを退院できる状態でしたが、Aさんはまだ子どもを家庭で育てていく自信が持てず拒絶する気持ちも強くありました。児童相談所職員、医療ソーシャルワーカーと夫婦で話し合い乳児院に一時保護となることが決まりました。弟に会いたがる兄弟児や夫に後押しされ乳児院スタッフに見守られながら面会を重ねていくなかでAさんは赤ちゃんと一緒の時間を楽しめるようになり誕生日はお家で祝いたいと１歳を前に家庭引き取りとなりました。

連携する職種と部署

職種
- 産婦人科医70・助産師72・精神科医70・保健師77
- 医療ソーシャルワーカー73・小児科医70・心理士72

部署
- 産婦人科クリニック81・精神科クリニック82・児童相談所88
- 乳児院99・里親･特別養子縁組98

連携症例ファイル　#4

育児不安（28歳）

はじまり

Aさんは、第一子（男児）を里帰り出産しました。妊娠出産の経過は順調で、産後1ヶ月の時、夫と暮らす自宅に戻ってきました。現在、子供は生後7ヶ月になっています。夫は、休日にはオムツ替えをしてくれるなど育児には協力的ですが、平日は仕事で帰りが遅く、子供と関われる時間はほとんどありません。双方の両親は遠方に住んでいるため、普段、育児面で頼れる人は、身近にはいません。昔からの友人はまだ独身の人が多く、子供ができてからは、会う機会も減ってきてしまいました。Aさんは、妊娠中に区の母親学級に参加しましたが、特に親しい知り合いはできませんでした。

気づき

6か月健診の時に、**小児科**の先生から子供の体重増加不良を指摘されました。母乳の出があまりよくなかったため、**助産師**さんから指導を受けて、1日に数回はミルクを足すようになりました。しかしAさんは完全母乳を理想としていたため、哺乳瓶でミルクをあげている時には、自分が母親失格のような気がして、気分が落ち込むことも多くなってきました。最近は子供の夜泣きが激しくなり、夜中にミルクをあげてもオムツを替えても、なかなか泣き止んでくれません。「いつまでこんな日々が続くのか」と先が見えない状態に途方に暮れて、夜中にたびたび泣きたい気持ちになってしまいます。寝不足で疲れもたまり、日中も子供の泣き声にイライラすることも多くなってきました。子供は可愛いですが、虐待のニュースをみると、自分もいつか手をあげてしまうのではないか、と不安になってきてしまいました。

つなぐ

生後8か月の時、Aさんは乳腺炎で**産婦人科**の母乳外来を受診しました。その時に体調について聞かれたので、不眠やイライラについて助産師さんに話をしました。Aさんは一人で育児を頑張っている状態であることを心配され、日中、子供が寝ている時には無理に家事をせず、一緒に横になってできるだけ体を休めるようアドバイスを受けました。産婦人科の先生からは、今後うつ症状が出てきた場合には、**精神科の先生**を紹介してもらえることになりました。また、助産師さんに教えてもらい、区のホームページを見たところ、**子育て世代包括支援センター**や、**保健所**にはファミリー・サポート・センターがあり、育児相談も常時行われていることがわかりました。保健所の**保健師**さんを訪ねてみたところ、育児が大変な時には一人で背負いこまず、**育児ボランティア**や一時預かりの制度を利用することをすすめてもらいました。

その後

Aさんは保健師さんと話をして、母乳育児が全てではないことも納得できました。そして話を聞いてもらっているうちに、育児において「絶対にこうすべき」と考えすぎることはやめよう、と思えるようになってきました。子供も生後9か月となり、離乳食が始まると、だんだん夜も寝てくれるようになってきました。区の栄養相談に参加し、**栄養士**さんに離乳食のアドバイスを受けるなど、現在は区の機関を積極的に利用するようにしています。子供を児童館に連れて行けるようになると、同じ年頃の子供をもつお母さんとも話をする機会が増えました。上にお子さんのいるお母さん達からは、「こんなに大変なのは今だけよ。」と言われ、少し気持ちも楽になってきています。現在は区の一時預かり保育を利用するなどして自分の時間を持ち、できる時にリフレッシュするようにしています。

連携する職種と部署

職種
- 小児科医70・助産師72・産婦人科医70・精神科医70・保健師77
- 栄養士74・育児ボランティア

部署
- 小児科クリニック80・産婦人科クリニック81
- 子育て世代包括支援センター90・保健所89